

本部隊 豪雨被災地へ

被害甚大な熊本県で 要請に応え初動救援

令和2年7月豪雨

九州・中部地方など広範囲に被害をもたらした「令和2年7月豪雨」。天理教災害対策委員会(仲野芳行委員長)は13日、被害甚大な熊本県へ災害救援ひのきしん隊(災害救援、田中勇文(いづみ)本部長)本部隊の派遣を決定。第1次隊として、本部隊をはじめ熊本・長崎・宮崎の各教区隊が出動した。また、九州の他県や、中部・中国地方の各県でも、自治体や社会福祉協議会(社協)の要請に応じて、各教区隊が活動している。ここでは、熊本県内で初動救援に従事した第1次隊の活動をレポートする。(21日記)

災救隊

り、災救隊熊本教区隊(深水真次隊長)が7日から10日にかけて管内の被災教会や布教所、信者宅へ出動。また11日には、田中本部長(54歳)が現地入りし、被害状況の把握に努めた。

感染防止の対策徹底

熊本県社協では、今回の豪雨災害におけるボランティアの受け入れを、新型コロナウイルス感染症拡大の状況に鑑みて慎重に協議。人吉市災害ボランティアセンターでのボランティアの募集を県内在住者に限定するなど、感染拡大の防止に努めつつ、被災地の復旧作業を進めることにした。

球磨川氾濫の1市2村で

第1次隊レポート

梅雨前線と低気圧の影響により積乱雲が次々と発生し、熊本県南部は3日、記録的な豪雨に見舞われた。4日未明には、熊本、鹿児島島の両県に「大雨特別警報」が発令。河川の氾濫や土砂崩れが各地で相次いで発生し、熊本県内では東西に流れる一級河川・球磨川流域の12カ所が氾濫した。

同県内における家屋の全半壊、一部損壊、床上・床下浸水は8千棟以上。なかでも球磨川の本流と支流の合流点に当たる球磨村渡地区や、人吉市中心部では、広範囲にわたって浸水・人的被害が出た。

こうしたなか、既報の通り、同県内における家屋の全半壊、一部損壊、床上・床下浸水は8千棟以上。なかでも球磨川の本流と支流の合流点に当たる球磨村渡地区や、人吉市中心部では、広範囲にわたって浸水・人的被害が出た。



第1次隊の隊員たちは、球磨川沿いに位置する小学校のグラウンドで汚泥を撤去した(17日、球磨村渡地区で)



球磨村の松谷村長が、駆けつけた隊員たちへ感謝の言葉を述べた(同)



出動前、非接触型の体温計で検温。体調管理を徹底した(18日、相良村の宿営地で)

こうしたなか、県議会議員の緒方勇二さん(59歳・中球磨分教会ようほく)を通じて、球磨、相良の両村から直接、出動要請を受けた災救隊本部は、一般のボランティアとは異なる特別態勢で同県へ出動することになった。地域住民との接触を可能な限り避けるため、公共施設での作業を優先することなどを両村の村長と申し合わせ、新型コロナウイルスの感染拡大を防止する対策を最大限講じたうえで、17日の結隊式に臨んだ。

宿営地では、施設内を定期的に消毒。隊員たちは、マスク着用や、隊服および手指の消毒、検温などを徹底して現地入りした。球磨村の松谷浩一(57歳)村長は「災救隊の方々には、4年前の『熊本地震』の際に計り知れないほどのご協力を頂戴した。今回の豪雨災害を受け、こうしたときだからこそ、専門的なノウハウを有し、自己完結型の救援活動を展開する皆さまへ、だっこのお願い」として出動を要請させていたと話す。

遅れ、被災から2週間が経ったこの日も、自衛隊が現地入りし、大型の災害ごみを搬出するとともに、道路の復旧作業を行っていた。同地区の球磨川沿いに位置する渡小学校は、川の氾濫により校舎1階の天井まで浸水。グラウンドや周辺の道路にも汚泥が流れ込んでいる。

隊員たちは、整列して松谷村長や同区の森住寛教育長(60歳)にあいさつすると、早速、小学校周辺の汚泥の撤去に着手した。この日は久しぶりの晴れ間が広がり、気温26度の夏日となった。隊員たちは、前日までの雨の影響で水を含んで重くなった汚泥を手作業で運び出す。さらに、重機を駆使し、通行不能となった小学校周辺の道路の土砂などを撤去した。

今年3月まで同校の校長を務めていた森教育長は、「渡小学校は昨春秋に大規模な改修工事を終えたばかりだった。このたびの豪雨で校舎が水浸しになり、地域の方々ははじめ、私自身も絶望に打ちひしがれていた。そんな中で駆けつけてくださった災救隊の方々には、私たちの『希望の光』だ」と、言葉を詰まらせながら感謝の思いを語った。

一方、別の班の隊員たちは、相良村から直接要請を受け、同村内の民家へ。家屋内に流入した流木や土砂の撤去作業に汗を流した。この家に一人て住む80代

女性には、急激に水位が上がったなか、命からがら避難したという。女性は「川から流れてきた木が家に突き刺さり、私一人では全く手を付けられない状況だった。災救隊の皆さんには、感謝してもきれない」と話した。また、甚大な被害に見舞われた人吉市中心部の球磨川分教会(田山國孝会長)でも、家財道具の撤去などに当たった。

田中本部長は「4年前の『熊本地震』での救援活動を通じて、行政の方々に災救隊の実績を高く評価していただいたことが、今回のコロナ禍での緊急出動につながった。今後の救援活動では、小学校の建物内部や多くの人的被害が出た老人ホームなどで、土砂の撤去や施設内の洗浄を進めていく。新型コロナウイルスの

地域の『希望の光』に

活動初日の17日正午。隊員たちは準備を整え、3班に分かれて出動した。作業現場の一つ、球磨村渡地区は、「大雨特別警報」が解除された後も継続的に雨が降り、土砂崩れなどが発生して、同地区へつながらず、国道が寸断。復旧作業が

また、災救隊の初動救援の様子を『朝日新聞』九州版(7月20日付)に写真入りで紹介された。記事では、災救隊の活動が「被災地に迷惑をかける『自己完結型』であること」などが紹介されている。

文〓鈴木宏正
写真〓中野理弘



令和2年
7月豪雨

熊本での活動に区切り

災害隊

本部隊の全4次隊 12日間で延べ947人

九州・中部地方など広範囲に被害をもたらした「令和2年7月豪雨」。既報の通り、天理教災害対策委員会(仲野芳委員長)は、7月17日から、災害救援ひのきしん隊(Ⅱ災害隊、田中勇文(ゆうぶん)本部長)本部隊を、甚大な被害に見舞われた熊本県の1市2村へ派遣。第1次から第4次にわたって土砂撤去などの救援活動を展開し、28日をもって出動態勢に区切りをつけた。この間の出動12日間で、本部隊・7教区隊から成る全4次隊で延べ947人が実動した。

(7月29日記)

豪雨の直後、初動救援活動として、熊本教区隊(深水真次(まこと)隊長)が7日から10日にかけて管内の被災教会、教会よろぼくを通して、



職員室内に流入した土砂を、手作業で搬出する隊員たち
(7月22日、球磨村の渡小学校で)

球磨、相良の両村から直接の出動要請を受けた災害隊本部は、新型コロナウイルスの感染拡大防止への万全の対策を講じたうえで出動した。

17日から19日にかけて出動した第1次隊(本部隊・熊本・長崎・宮崎の各教区隊)に続き、第2次隊(20日、本部隊・熊本・鹿児島・佐賀・大分の各教区隊)、第3次隊(23日、25日、本部隊・熊本・福岡の各教区隊)、第4次隊(26日、28日、同)が、い

丁寧な作業が喜ばれ

第2次隊は、第1次隊の活動を引き継ぐ形で、球磨村の渡小学校と人吉市中心部の球磨川分教会(田山國孝(くにたけ)会長)の2カ所で救援活動を展開した。

氾濫した球磨川沿いに位置し、校舎1階の天井まで浸水した同校。隊員たちは教室内に散乱した机や本棚を整理するとともに、流入した土砂を撤去。手作業で校舎外へ搬出した後、重機とタンクをフル稼働して仮設の集積場へと運んだ。

さらに第2次隊からは、同校に隣接する特別養護老人ホーム「千寿園」周辺の土砂の撤去作業も並行して進めた。

同園では、球磨川が危険水位に達した際に、園スタ



後藤副施設長のあいさつの後、隊員たちは園内の物品の搬出を行った
(24日、同村の千寿園で)

ツプが入所者を2階へ避難させた。ところが、避難途中で球磨川が氾濫し、濁流がガラス窓を割って流入。1階部分が浸水し、足が不自由な入居者14人の避難が間に合わなかった。

作業を開始した20日時点では、同園の内外は汚泥が押し寄せたままの、全く手付かずの状態。隊員たちはまず、同園周辺に散乱した品々を回収して丁寧に仕分けをした。

そんななか、ある隊員が貴重品の入ったバッグを発見。現場近くの警察へ届けるところ、その日のうちに持ち主の手に渡り、大変喜ばれたという。

22日には重機を使用し、同園周辺の土砂を一気に取り除いた。

土砂が山積みになっている現場の傍らで、園への問い合わせに対応していた後藤竜一副施設長(55歳)は、「入居者の方々が被害に遭

いながら早く園内の整理に手が付けられるとは思っていませんでした。専門的な技術を駆使して、丁寧に作業してくださる災害隊の皆さまには、感謝してもきれない」と語った。

長年の活動が信頼に

第3次隊の活動初日となる23日。隊員たちは足早に車に乗り込み、2班に分かれて球磨村と人吉市中心部の各現場へ。

厚い雲が空を覆い、気温は28度まで上昇して蒸し暑い。足元がぬかるむなか、隊員たちは第2次隊の作業を引き継いで、千寿園の駐車場に積まれた土砂を重機と手作業で仮設の集積場へと運び込んだ。また渡小学校では、土砂の撤去を終えた教室や廊下の壁や床を、高圧洗浄機と水切りを使って丁寧に洗った。

24日朝。前夜から降り続

いた雨の影響で、球磨村に避難勧告が出された。災害隊も出動を見合わせて待機し、その後、現場周辺の状況を確認したうえで、1時間遅れて出動。状況の変化に合わせて、細心の注意を払いながら作業を進めた。千寿園では屋外の汚泥撤去に区切りがついたことから、園内の物品の搬出に着手。ところが、停電が続く園内は薄暗く、堆積した汚泥には散乱した物品が埋まったまま。隊員たちは足元がおぼつかないなか、ベッドやソファなどの大型物品は数人がかりで、いすなどの中型物品はバケツリレー方式で外へ運び出していく。搬出した物品は、重機とタンクを使って同園の駐車場へ運び、最後は手作業で整頓した。

続く第4次隊は、同園の物品搬出や汚泥撤去、洗浄作業などを、また同校体育館倉庫の整理などにも汗を流した。

田中本部長は「新型コロナウイルスの影響があるなか、近隣の教区隊も出動できたのは、災害隊の長年の活動が行政や地域の人々から信頼を得てきた証拠。本部隊としての活動は、これでひと区切りとなるが、今後は各教区隊が被災地のニーズに合わせて対応していく」と語った。

◇

なお、全4次隊の出動12日間で搬出した土砂は890ト、瓦礫は65ト、洗浄した面積は1万76平方メートルに上った。